「幼児期の終わりまでに育ってほしい1０の姿とは？」

0歳児の姿からつながっています　2021．3．25　大分県教育委員会

影に不思議がるB児：「？？？　う～ん？」

A児の気持ち：「あっちにもいってみよう！」

「いろんなはっぱあるね！」

「せんせいもみつけたよ！」

A児の気持ち：「これ、なにかなぁー？　」

CASE 26
0歳児

心地よさのなかで

協力園
大分市
わかばこどもルーム

（子どもの実態）

0歳児クラスは、「はう」「つたい歩き」「歩行」と動きの姿が月齢の幅で様々ですが、自分自身の意思で、今持っている力を発揮して体を動かし、移動する姿が見られています。また、「遊び、食事、睡眠の基本的生活の流れ」が安定し、保育者が傍で見守っていると安心して自分から遊ぼうとし、機嫌よく過ごせる時間も多くなってきました。

暖かい日は、散歩カーに乗って近隣の公園までの風景や人や車の出会いを楽しんだり、公園で過ごしたりすることも大好きな時間になっています。

今日は、冬日の中のお散歩日和です。散歩カーに乗って、公園にお出かけです。保育者は、散歩カーを動かしながら、道路にでこぼこがあると、「がったん、ごっとん」と声を掛けています。子どもたちもそれに合わせるように体を揺らします。そして出会う人に「おはようございます。」と保育者が挨拶をする度に、それに合わせて散歩カーの中で、挨拶をするように頭をぺこりと下げる子どももいます。また、公園までの道ですれ違う車にバイバイをしたり、周りの物を指さしたりする姿も見られます。横断旗を前に出して、左右を確かめる保育者の行動にも興味を示し、身を乗り出して見ようとします。

散歩カーから公園が見えてくると、気付いた子どもが「あ！」と公園を指さし、知らせています。何度か遊んだことのある公園であることに気づき、目を輝かせて散歩カーの中で弾んでいます。

いよいよ公園に到着です。「さぁー、たくさんあそぼうね○○ちゃん。」と、保育者は一人一人の名前を呼びながら散歩カーから降して、子どもたちの動きを見守ります。

保育者に見守られている安心感で、「歩行」や「はう」などの自分の行動を始めます。また、友達と同じボールや手作りの羽子板風おもちゃを手にもっていることに満足し、見せ合っている姿も見られています。

A児は、這って移動しながら葉を見つけたようです。葉を手にすると、お座りに変え指につかんでいるものを今にも口の中に入れそうです。それに気づいた保育者が傍に座り、「先生も見つけたよ。」と手の平に載せた赤い葉を見せています。A児も、口に入れようとしていた葉を保育者の方に差し出して見せました。「色がちがうね。」と保育者が伝えると、じっと見比べているように見受けられます。その傍で、保育者と同じ赤い葉を手にしているB児には、「同じだね。」と声を掛けています。そして、周りに落ちている葉を「赤い葉っぱ、茶色い葉っぱ」「長いね、少し小さいね」とA児とB児に伝えながら、二人の前に並べました。

A児は、並んだ葉をそっと触りながら、保育者の顔と葉を交互に見ています。保育者の伝えている言葉を、体感しているように感じ取れます。しばらく保育者と一緒に落葉を触ったり、手に乗せてもらったりしていましたが、保育者との関わりに満足したようで、A児もB児も周りの様子を見渡し、また行動開始です。

A児は、這いながら手に触ったものがあると止まって座り、手の平に置いて見つめるとすぐにその場に置き、前へ進むことを繰り返しています。

B児は、一点に見入っています。B児の影です。それに気づいた保育者も一緒に、B児の前に広がっている黒く動いている影に触ったり、保育者の影をB児に重ねたりしながら、「こっちは、Bちゃんの影だよ。」と知らせています。

先日、公園で遊んだ時にシャボン玉を飛ばすと、つかもうとしたり追いかけようとしたりする楽しい姿が見られたことから、保育者は、シャボン玉の準備をしていました。しかし、今日の子どもたちには必要なかったようです。

暖かく感じられる日差しの中で、思い思いの探索に興味を示す姿が公園に広がっていました。

健康な心と体・自然との関わり
環境構成のポイント

- 近隣の公園に向かう道のりを何度か経験していることや保育者の心地よい声掛けが、安心して散歩カーに乗り、周りの様子に興味・関心を示すことにつながっている。
- やってみようという気持ちを受け止め、温かく見守る保育者の関わり。
- 不思議さや子どもの興味・関心に共感しながら、言葉を添える保育者の関わり。
- 暖かい日差しと自然に囲まれ、遊びなじんでいる公園。
- 一人一人の発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に身体を動かす事のできる公園の空間。

事例から見られる10の育ち
自然との関わり
⇒
「身近なものと関わり感性が育つ」
「身近な人と気持ちが通じ合う」

子どもの手にしたもの、感じていることに、保育者が丁寧に寄り添い、言葉を添えることで、葉の色や形、感触を体感し、大事にそっと触ろうとする姿が見られた。また、子どもが自分の影に興味を持っている姿に保育者が気づき、共有する関わりが見られている。子どもは、何かをじっと見つめたり、何度もあれこれと試したりしながら不思議さや楽しさを感じ、自分から関わろうとする意欲が育まれていくのではないだろうか。

保育者の受容的、応答的な関わりは、さらに子どもの気持ちを豊かにする。園内外の身近な自然に触れ合う体験を通して、自然の変化などを感じ取り、幼児期の終わり頃には好奇心や探究心をもって考えたことを言葉などで表現しながら、身近な事象への関心を高めていくことが考えられる。

事例から見られる10の育ち
健康な心と体
⇒
「健やかに伸び伸びと育つ」
「身近な人と気持ちが通じ合う」

保育者との安心できる関係の下で、「はう」力を使って、環境に関わろうとする意欲が見られる。また、見つけた落ち葉を手にすると、「はう」姿勢から、つかんだ葉を見ようと、座りの姿勢に変えるなど、乳児なりに、心身の両面を働かせようとしていることが伺える。さらに、保育者の関わりに満足すると、目の前から少し先の方まで行動範囲を広げようとするなど、安心して今もっている力を発揮して、環境に関わっていることが感じ取れる。

こういった姿は、これからの保育所生活の中で発達に応じた経験を積み重ねながら、幼児期の終わり頃になると、自分のやりたいことに向かって、心と体を十分に働かせ、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになることが考えられる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
「1０の姿」

- 健康な心と体
- 自然との関わり・生命尊重
- 豊かな感性と表現
- 社会生活との関わり

保育所の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

「10の姿」につながる「乳児の３視点」

「健やかに伸び伸びと育つ」
「身近な人と気持ちが通じ合う」
「身近なものと関わり感性が育つ」